

# 『草枕』における環境の捉え方に関する研究

尾野薫<sup>1</sup>・小嶋健志郎<sup>2</sup>・星野裕司<sup>3</sup>・増山晃太<sup>4</sup>

<sup>1</sup>学生会員 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号 Email:089d8808@st.kumamoto-u.ac.jp)

<sup>2</sup>非会員 フリーランス (〒170-0011 東京都豊島区池袋本町4丁目1番17号103号室 Email:k.kenshiro@gmail.com)

<sup>3</sup>正会員 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号 Email: 061d9412@st.kumamoto-u.ac.jp)

<sup>4</sup>学生会員 熊本大学大学院 (〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2丁目39番1号 Email: hoshino@gpo.kumamoto-u.ac.jp)

本論文では、草枕ハイキングコースと『草枕』について分析することで、環境の捉え方に関する考察を深めることを目的とした。まず、『草枕』冒頭部分のモチーフとなっている草枕ハイキングコースについて、地形・可視領域・現地調査による分析から5区間に分類した。続いて、『草枕』の対象段落を主人公の意識の流れによって分類し、主人公の環境の捉え方を明らかにした。また、『草枕』では環境の抵抗を契機として、主人公の意識が徐々に環境へと向いていくことがわかった。さらに、『草枕』と実風景の相関を考察することで、構図的な風景の前に受ける環境の抵抗を通じて、環境を相貌的に捉えることができる可能性を示唆した。

キーワード：草枕 夏目漱石 草枕ハイキングコース 地形 環境の捉え方

## 1. 序論

### (1) 背景

中村良夫は風景を“地に足をつけて立つ人間の視点から眺めた土地の姿”と定義している<sup>1)</sup>。ここでは、“人間の視点”と“土地の姿”の二点の関わりの中から風景は生まれるものだということが読み取れる。つまり、土地の姿を人間が認識することで風景は捉えられるのである。

また、柄谷は日本近代文学について研究する中で風景の発見について取り上げ、以下のように述べている。

すでにいったように、風景はたんに外にあるのではない。風景が出現するためには、いわば知覚の様態が変わらなければならないのであり、そのためには、ある逆転が必要なのだ。(中略)

いいかえれば、周囲の外的なものに無関心であるような「内的人間」inner manにおいて、はじめて風景がみいだされる。風景は、むしろ「外」をみない人間によってみいだされたのである。<sup>2)</sup>

こうした風景の発見に関連して、柄谷は夏目漱石について以下のように述べている。

私の考えでは、「風景」が日本で見出されたのは明治二十年代である。(中略) 漱石はちょうどこの過渡期に生

きたといつてよい。むしろそれを過渡期とよぶのは歴史主義的な見方にすぎない。実際は、彼は、英文学を選択したあとで、彼自身において認識の布置が根本的に変わってしまったことに気づいたのだ<sup>3)</sup>。

このように、夏目漱石自身は風景という概念を発見した時代に生きた人物の一人であるといえる。

また、漱石は、自身の作品である非人情をテーマに描いた『草枕』に関して以下のように述べている。

私の『草枕』は、この世間普通という小説とはまったく反対の意味で書いたのである。ただ一種の感じ美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットもなければ、事件の発展もない<sup>4)</sup>。

『草枕』とは、プロットや事件もない状態、つまりは当時流行していた西洋のロマン主義文学とは異なり、日常の中にある普段では気づかず受け流すような物事から、美しいものを見出すことを主旨としているのである。その方法として、物語中で他者と環境の捉え方の新たな提案を行っており、その特異な捉え方は重要なものだと考える。

また、『草枕』冒頭部分のモチーフとなった山道は現在「草枕ハイキングコース」と呼ばれ、多くの漱石愛好

家に利用されている。漱石が二度訪れている事実<sup>5)</sup>もあり、この土地の姿も『草枕』の題材として取り上げられるほど漱石に強い印象を与えた重要なものである。

本研究では、風景の発見の時代に生きた人物である夏目漱石の作品『草枕』の主人公の環境の捉え方を、人間の視点の一例として参考にする。そのうえで、草枕ハイキングコースを土地の姿の一例として取りあげ、現地調査を行うことで人間の視点と土地の姿の関係について考察することを目的とする。そのために、①草枕ハイキングコースがどのような特徴を有しているのか、②『草枕』の中で、どのように主人公の意識が変化し、環境を解釈しているのか、③地形的特徴と『草枕』における解釈は相関しているのか、の三点について明らかにする。

## (2) 本研究の位置付け

これまで、文学作品を対象とした研究は数多くなされている。池田らは、文学作品から空間描写を読み取る方法を提案し、ケーススタディをしながら分析方法を具体的に検討した<sup>6)</sup>。これにより得られた知見をもとに、1970～94年の芥川賞受賞作品を分析対象として、自然景観に関する表現の出現傾向を舞台や年代と関連付けながら定量的に把握し、各要素の特徴とそれに付随する意味や変遷を捉えた<sup>7)</sup>。吉村らは、動態的景観モデルを規定し、風景がどのようなきっかけで変化するのかについて、松尾芭蕉の『おくの細道』をハイパーテキストモデルによる情報構造を分析した<sup>8)</sup>。山崎らは司馬遼太郎の『街道をゆく』を分析対象として、文章構成に着目することで地域イメージの表現手法について分析を行った<sup>9)</sup>。出村らは、本居宣長の『在京日記』を通して18世紀中葉の「清水祇園あたり」における行楽の空間の構造を明らかにした<sup>10)</sup>。このように、ある文学作品を分析対象とし、その舞台となる空間の分析や表現手法について知見を得る研究が行われている。本研究では、作品とモチーフとなった実空間との相関性をみることに新規性を見出した。

また、夏目漱石の作品に着目した研究についても、建築分野では行われている。若山らは、漱石作品の中の建築空間を舞台空間として捉え、その具体的な様相を明らかにすることで長編小説の全体的傾向と類型を明らかにした<sup>11)</sup>。その後、『吾輩は猫である』から『三四郎』に至るまでの5作品について、舞台である建築空間の「意味」の構造を、作品自体の中から探ろうとした<sup>12)</sup>。また、徐らは夏目漱石の『草枕』を研究の対象とし、作品を4つの境界的空間の存在を理解し、建築空間の構築の可能性について考察した<sup>13)</sup>。そして、『草枕』の中では絵画的モチーフや絵画に関わる話、一つの絵を思わせる文体が数多く描写されていることから、このように言葉で語られる絵画的表現のことを徐らは絵画的言語表現、そのことばでつくりだされる言語空間を絵画的言語空間と定義した

上で、その絵画的言語空間について分類と考察を行い、絵画的言語空間内の素材の配置構成から建築的空間構成の図式の可能性を試みた<sup>14)</sup>。このように、夏目漱石の作品を分析対象とし、建築的視点から空間構造やその意味について考える研究はなされている。本研究では、草枕ハイキングコースを土地の姿の一例として捉え、その地形的特徴を解釈する。また、作中の主人公の意識の変化や環境の解釈についても分析を行い、地形的特徴と『草枕』における解釈の相関性について考察することを目的としている。

## (3) 本論文の構成

本論文では、2章で、草枕ハイキングコースの地形的特徴を整理し分類を行う。3章では、『草枕』の概要と対象段落を述べた後、主人公の意識の変化によって分類を行う。そのうえで、主人公の環境の捉え方を分析・考察する。4章では、2、3章の分類結果を照らし合わせて、物語の流れを縦断図にプロットする。その後、主人公の環境の捉え方を参考として実風景との相関を考察しながら、環境の捉え方に関する考察を深めることが本論文の構成である。

## 2. 草枕ハイキングコースの地形分析

### (1) 対象地の基礎情報

#### a) 草枕ハイキングコースの概要

草枕ハイキングコースの位置を、図-1に示す。草枕ハイキングコースは、昭和59年に熊本市が健康促進を目的に設定した。同コースは、熊本県熊本市島崎町の岳林寺と呼ばれる寺院から、同県玉名市天水町の漱石が実際に宿泊した宿である前田家別邸にたどり着くまでの約15.8kmに指定されている。途中には、漱石が立ち寄ったといわれる二つの茶屋跡(鳥越の茶屋跡、野出の茶屋跡)や、漱石が書いた俳句の碑などが点在している。さらにその道のりも、鎌研坂といわれる坂道や、石の畳でできた坂道、竹林に囲まれた路や、みかん畑の農道など多種多様である。

#### b) 対象地の地勢情報

草枕ハイキングコースは、熊本市の西側に位置する金峰山地域を抜けていく道筋になっている。この山地の盟主である金峰山は、熊本市の代表的な山として市民に親しまれている。また、地形上この山地は一つの二重火山の性格を持っており、熊本県東部に位置するカルデラ式火山の阿蘇山の小型模型のような形をしている。そのため、東の阿蘇に対して“西山”と呼ばれていた。漱石が熊本での体験をモチーフに執筆したもう一つの作品である『二百十日』も阿蘇山を舞台としていることを考える

と非常に興味深い。このような地形のため、金峰山を囲み、北側に二ノ岳、三ノ岳、東側に小萩山、荒尾山、本妙寺山、南側に権現山などの外輪山が形成されており、同コースも市街地側から外輪山の切れ目に位置する島崎町を抜け金峰山の麓のカルデラ部分に入り、外輪山の一つである二ノ岳を越え天水町へと向かう道筋となっている<sup>15)</sup>。

さらに到着地である天水町は、この山地の北西側に位置し、なだらかな傾斜に町が成り、その先が有明海に面している。その潮風と四季温暖な地のためミカンが栽培されており、石垣による段畑のミカン園が数多く点在している。また、天候のよし悪しは関係するものの、海の奥には長崎県島原市の普賢岳や熊本県天草市の島々を眺めることができる。

## (2) 地形分析

本節では、草枕ハイキングコースの地形を勾配及び可視領域の二視点から分析する。

### a) 分析手法

本研究では3DCG フリーソフトである『カシミール』(DAN 杉本：カシミール 3D/風景 CG と地図と GPS のページ、<http://www.kashmir3d.com/>) を使用した。これを用いて、草枕ハイキングコースのルートを作成し、同時に縦断面

を作成した。さらにその中から約 500m 間隔で全 21 点(01~21)を抽出し、その各地点間の勾配(H/L)および各地点の可視領域の算出を行った。可視領域の算出は、人間の目線とおおよそ同じにするため、地面から 2m の位置で行っている。各地点の番号と位置を図-1 中に示す。

### b) 勾配 (H/L) の結果

全 21 点の地点間の勾配を算出した結果を、図-2 に示す。この結果より、ハイキングコースを以下の四区間に区別することができる。

01~07 上りの急勾配      07~12 下りの緩勾配

12~16 上りの急勾配      16~21 下りの急勾配

### c) 可視領域による分析結果

可視領域による分析結果は、現地調査の結果とともに地形的区間の特徴として次節で整理する。

## (3) 地形的区間の特徴の整理

勾配によって区別した 4 区間について、それぞれの可視領域と現地調査から考察し、下記に示す 5 区間に分類することができた。草枕ハイキングコースの分類結果外略図を、図-2 に示す。また、可視領域の分析結果の一例として、地点 05 における結果を図-3 に、地点 14 における結果を図-4 に、それぞれ示す。なお、図-3 及び図-4 において色のついている箇所が、可視領域を表している。

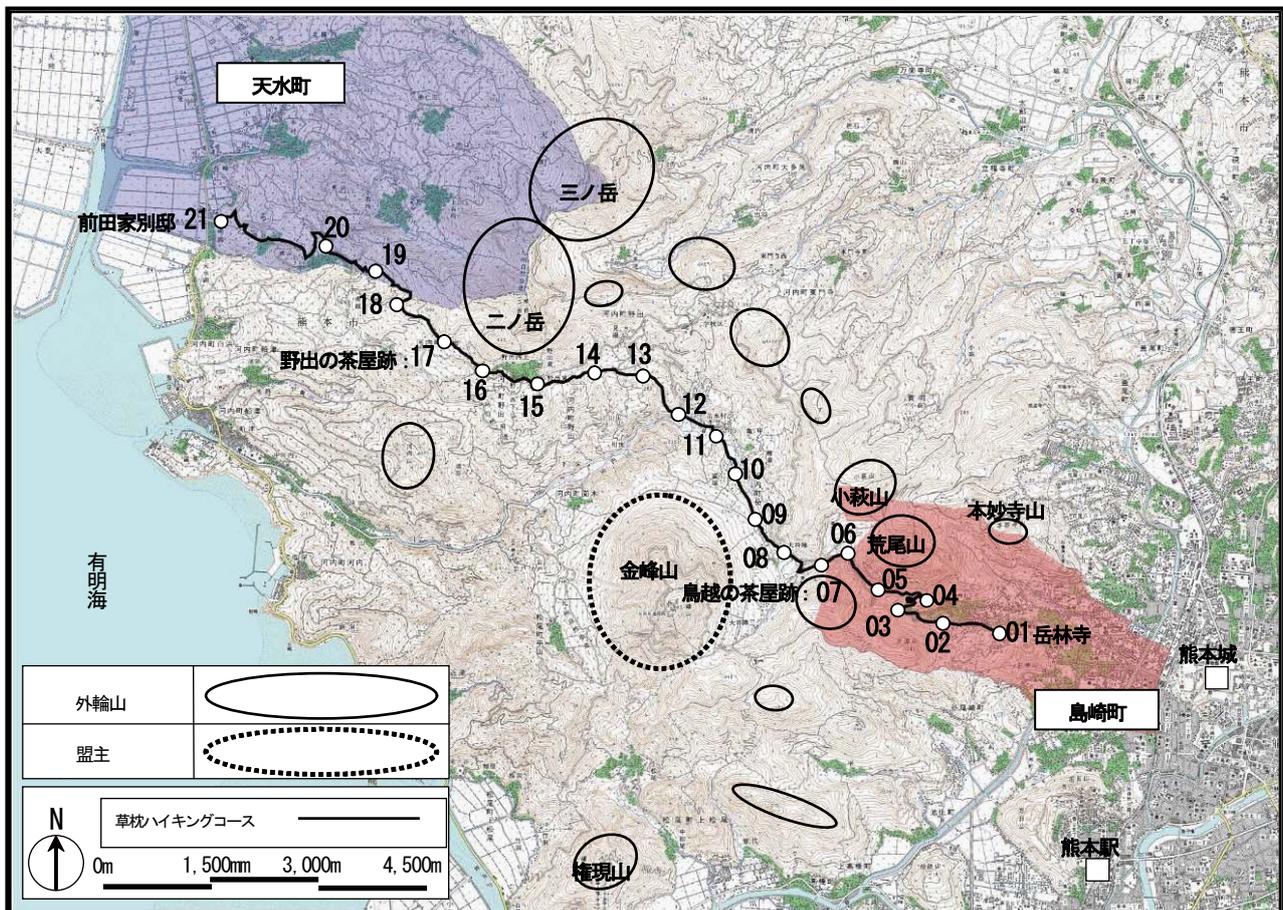


図-1 草枕ハイキングコースの位置

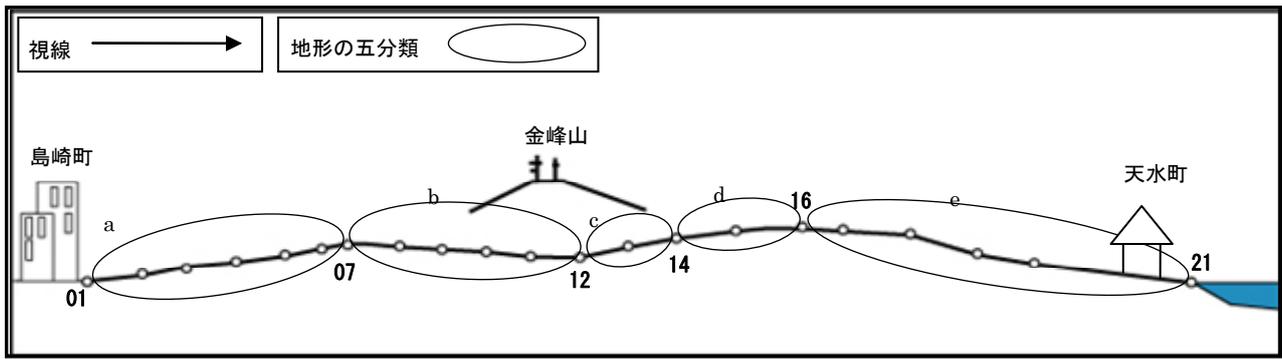


図-2 草枕ハイキングコースの分類結果概略図

また、峠の茶屋は作品中には一つのみ描かれているが、図-1 から見て取れるように峠は二つ存在している。実際のコースにおいても、地点07の鳥越の茶屋跡と地点16の野出の茶屋跡の二つの跡地があることがわかった。

**a) 01~07**

市街地側から金峰山地域に入る際の外輪山に位置するため上りの急勾配になっている。道の左右に可視領域が広がらず、加えて雑木林に囲まれているため一種のトンネルのようなつくりになっている。一方で、熊本市を眺望できる箇所がある。

**b) 07~12**

カルデラ内に位置する下りの緩勾配になっている。金峰山地域のカルデラ部分に位置し、周囲は外輪山に囲まれているため、囲まれ感を感じる空間である。

**c) 12~14**

天水町とカルデラ部分を隔てている外輪山の一つである二ノ岳があるため、上りの急勾配となっている。a) 01~07同様、杉林に囲まれているためトンネルのようなつくりになっている。さらに道が石畳となっている。

**d) 14~16**

c)と同様に、天水町街地側から金峰山地域に入る際の外輪山に位置するため上りの急勾配となっている。金峰山地域の山並を眺望できる。

**e) 16~21**

二ノ岳から下っていくため下りの急勾配になっている。有明海やそこに浮かぶ天草の島々や、普賢岳を眺めることができる。そのため、可視領域の結果でも最も範囲の広い場所となる。

以上の分類結果は、同コースは金峰山地域が二重火山によるものであると考えられる。

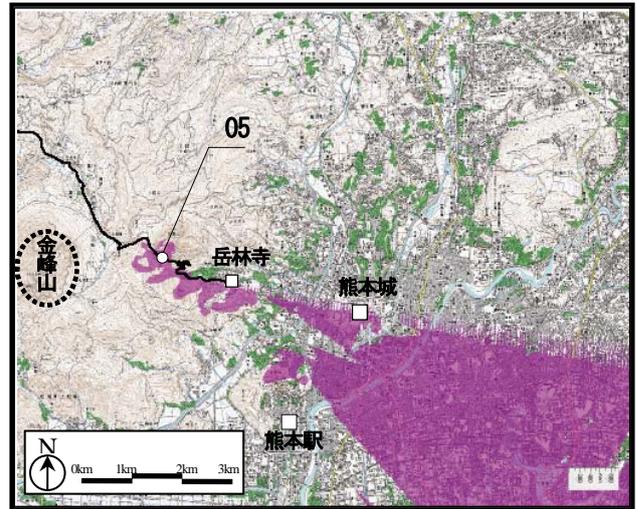


図-3 地点05の可視領域

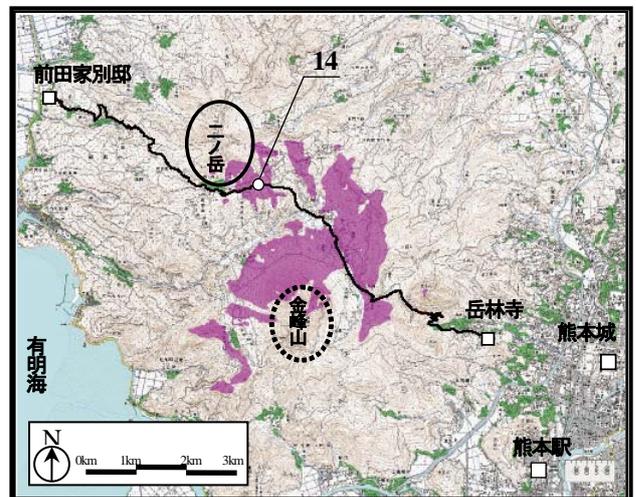


図-4 地点14の可視領域

### 3. 『草枕』の読解

本章では、『草枕』の対象段落を主人公の意識の変化ごとに分類する。そのうえで、主人公の環境の捉え方について文脈に沿って明らかにする。

#### (1) 作品の概要

小説『草枕』は、明治時代の文豪である夏目漱石が第五高等学校（現在の熊本大学）に講師として勤務していた際に、小天（現在の天水町）への旅の体験をモデルとして描いた作品である。小天へは、明治31年の正月にかけてと、その年の夏季の二度訪れており、同僚達と足をのびしている。これらの体験の8年後である明治39年に執筆したのが、小説『草枕』である。

小説の内容としては、主人公である画工が、宿までの道筋である山道を歩きながら周囲の環境と触れ合う場と、その宿がある那古井という場所を舞台に、下宿先にいる出戻り娘である那美などの那古井の人々との交流を描いた場面の二つで構成されている作品である。さらに、人の世の人間関係の煩わしさに疲れ果てた主人公は、それからの脱出を図るために非人情をこの旅の一貫したテーマに掲げている。非人情とは不人情とは異なるもので、“人情から超然としてそれにわずらわされないこと<sup>16)</sup>”を意味する。

#### (2) 『草枕』の読解

本節では、対象段落とその文章構成上の特徴を明らかにする。さらに、対象段落を主人公の意識の変化で分類する。そこから、具体的に描写の内容を検討し、主人公の環境の捉え方を明らかにする。

##### a) 対象段落

本論文では、草枕ハイキングコースをモチーフとして描かれた「一」と「二」を対象段落とする。「一」では、主人公の画工が那古井の宿へと向かうため、山道を歩いていく場面を描いた段落である。「二」では、山道の途中にある峠の茶屋に立ち寄り、そこに暮らす“婆さん”とのやり取りを描いた段落である。

##### b) 文章構成

読解対象となる段落の構成を、図-5に示す。「一」の山道を歩く段落は、以下の三つの要素によって構成されていると定義できる。

###### I. 内省

主人公の自我の内面を描いた文章

###### II. 風景描写

周囲の環境の様相とその解釈を描いた文章

###### III. 環境の抵抗

周囲の環境が主人公に及ぼす新しい感覚を描いた文章

また、この山道を歩く段落では、内省に浸っている主人公が環境の抵抗を契機に周囲の環境に気が向かうという一連の流れがある。さらに、非人情を目的として旅に出た主人公に意識の変化が起こることで、環境の解釈の仕方にも変化が現れる。これらの変化を考慮した結果、対象段落を五場面に分類することができた。

##### c) 文章の分類

ここでは、b)で分類した五つの場面について、小説の内容とともに順を追って説明する。

###### i) 自我世界の反省

この場面は、内省1のみの構成である。山道を登る主人公である画工が、今まで住み慣れていた人間社会の煩わしさを内省することから始まる。その煩わしさを上手く表現した有名な一文を以下に示す。

知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい<sup>17)</sup>。

人間というもの人間関係で悩まされるものであり、利害損得や人情に動かされるものである、ということが読み取れる。そのため、主人公にとって人間社会は住みづらい場所となっている。また、主人公の意識の中も人間関係が占拠しているため、その関わり合いのみで形成された自我の世界ができあがり、周りにある美しい事物へ焦点が向かなくなっていることを述べている<sup>18)</sup>。

このように、人間社会から自己を切り離し、人間関係について批評を行う場面である。この場面における概略図を、図-6に示す。

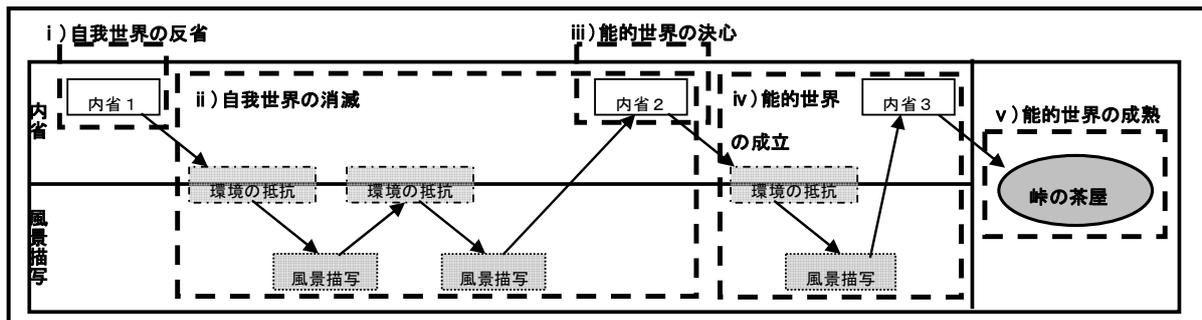


図-5 読解対象段落の構成

## ii) 自我世界の消滅

この場面は、環境の抵抗 1・2 を契機に風景描写 1・2 に移行し、内省 2 に続く構成である。仰観した山並みの風景描写を表した概略図を、**図-7** に示す。

まず、環境の抵抗 1 を契機に、内省 1 から風景描写 1 に移り変わる文章から始まる。**図-7①**のように、主人公は山路に転がっている大きな石に足元をすくわれ環境の抵抗 1 である“転ぶ”という触覚的抵抗を受ける。これにより、意識が向かうことのなかった風景描写 1 である仰観した山並みが現れる。その描写を、以下に引用する。なお、引用文中の下線は筆者加筆のものであり、以下の引用全てに対して同様とする。

立ち上がる時に向うを見ると、路から左の方にバケツを伏せたような峰が聳えている。杉か檜か分からないが根元から頂きまでことごとく蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだんに棚引いて、継ぎ目がしかと見えぬくらい霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去ったか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めている。天辺に一本見えるのは赤松だろう。枝の間の空さえはっきりしている。行く手は二丁ほどで切れているが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあそこへ出るのだろう。路はすこぶる難義だ<sup>49)</sup>。

ここでは、一枚の絵のように山並みが描写されている。また、**図-7②**にあるように、両下線部分からは威圧的で主人公に敵対するものとして環境が解釈されていることがわかる。さらに、**図-7③**では、この後に接触面である視点場の様子も描かれる<sup>20)</sup>。このように、転ぶという環境の抵抗を受けることにより、自己に敵対する環境の様相としての風景が描写されていることが分かる。

次に、環境の抵抗 2 を契機に風景描写 2 に移り変わる箇所を見ていく。菜の花の風景描写に関する概略図を、**図-8** に示す。**図-8①**において、主人公は環境の抵抗 2 である足の下からの“雲雀の声”という聴覚的抵抗を受ける。これにより、**図-8②**のように雲雀を探すように谷の下から空へという視覚の上下運動が生じる。また、雲雀に感情を移入している様子が描かれている。さらに歩を進めると風景の変化が生じる。その様子を以下に記載する。巖角を鋭どく廻って、按摩なら真逆様に落つところを、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあそこへ落ちるのかと思った。いや、あの黄金の原から飛び上がってくるのかと思った。次には落ちる雲雀と、上る雲雀が十文字にすれ違ふのかと思った。最後に、落ちる時も、上る時も、また十文字に擦れ違ふときにも元気よく鳴きつづけるだろうと思った<sup>21)</sup>。

ここでは、**図-8③**のように目の前に現れた菜の花を見下ろしながら、その菜の花を雲雀の生きる場所として描

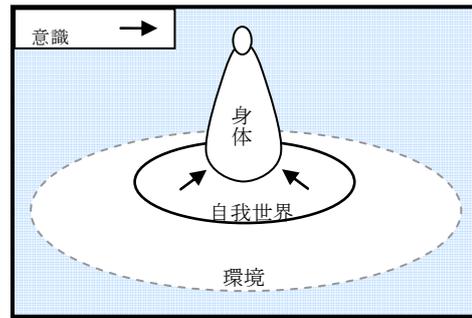


図-6 自我世界の反省概略図

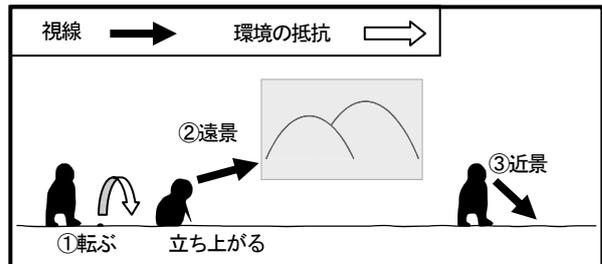


図-7 仰観した山並みの風景描写の概略図

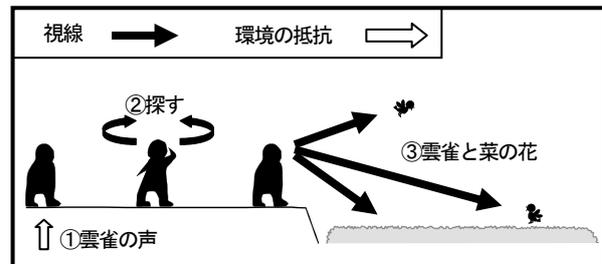


図-8 菜の花の風景描写の概略図

写していることがわかる。

最後に、意識の変化として自我世界の消滅の様子について追っていく。前述した雲雀と菜の花を捉えることで主人公の意識に変化が見え始める。その一文を内省 2 の中から引用する。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さえ忘れて正体なくなる。ただ菜の花を遠く望んだときに眼が醒める。雲雀の声を聞いたときに魂のありがたが判然する。  
(中略) 腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦勞も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。吾人の性情を瞬刻に陶冶して酔乎として酔なる詩境に入らしむるのは自然である<sup>22)</sup>。

前述の菜の花の風景描写と合わせて読み解くと、雲雀に感情を移入していた主人公が、雲雀の生きる場所としての菜の花に対し、間接的に親密さを感じていると考えられる。これより、i) 自我世界の反省で示した人間関係に占拠された意識が、環境に対して開き始めていることがわかる。また、前半の下線部では自己の魂のありがたを人間社会ではなく環境の中に見出していることがわかる。

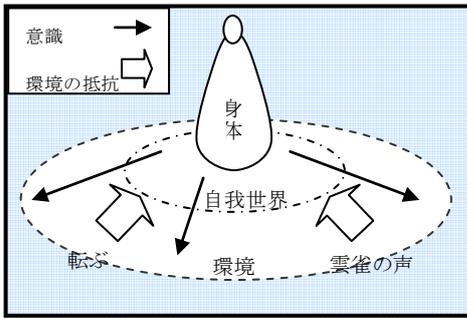


図-9 自我世界の消滅概略図

つまり、自然環境を自己の生きる場所として意識し始めているのである。

このように、環境から抵抗をうけることで、自己に対するものや生きる場所として解釈することで、主人公の意識も、人間関係に占拠されることでできあがっていた自我世界が消滅し、環境へ向かい始めていることを述べる場面である。この場面の概略図を、図-9に示す。

### iii) 能的世界の決心

この場面は、内省2のみの構成である。ここでは、非人情を目的として、自然のみの世界での陶酔を目的としていた主人公が、これから那古井（現：天水町）の宿へと向かうため、新たな他者との関係の持ち方を模索し、決心する場面である。主人公は既存の人間関係の持ち方を続けると、周囲の環境に向けて自我世界を消滅させてきた意味がなくなってしまうと考え、新たな他者の捉え方として能のように捉えることを決心する。この主人公の決心は、漱石によって以下のように記述されている。

よし全く人情を離れる事が出来んでも、せめて御能拝見の時くらいは淡い心持ちにはなれそうなものだ。能にも人情はある。七騎落でも、墨田川でも泣かぬとは保証が出来ん。しかしあれは情三分芸七分で見せるわざだ。我らが能から享けるありがた味は下界の人情をよくそのままに写す手際から出てくるのではない。そのままの上へ芸術という着物を何枚も着せて、世の中にあるまじき悠長な振舞をするからである。

しばらくこの旅中に起る出来事と、旅中に逢う人間を能の仕組と能役者の所作に見立てたらどうだろう。まるで人情を棄てる訳には行くまいが、根が詩的に出来た旅だから、非人情のやりついでに、なるべく節儉してそこまでは漕ぎつきたいものだ。南山や幽篁とは性の違ったものに相違ないし、また雲雀や菜の花といっしょにする事も出来まいが、なるべくこれに近づけて、近づけ得る限りは同じ観察点から人間を視てみたい。芭蕉と云う男は枕元へ馬が尿するのをさえ雅な事と見立てて発句にした。余もこれから逢う人物を——百姓も、町人も、村役場の書記も、爺さんも婆さんも——ことごとく大自然の点景として描き出されたものと仮定して取こなして見よう<sup>23)</sup>。

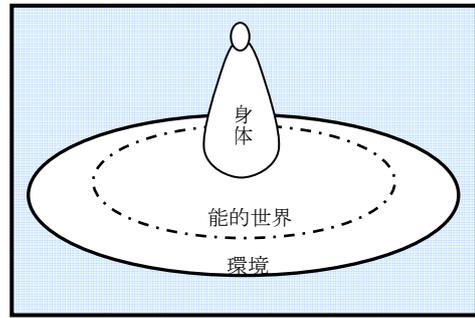


図-10 能的世界の決心概略図

まず、前半下線部に述べられている“能役者の所作”とはどういうことであるのか。“所作”とは能役者の型(振舞)ということである。能の型には、感情をあらわす型や女性をあらわす型などがあり、人を動作のみで表現する。よって、この役割としては、小説中で出逢う実際の人々を、これに置き換え動作のみで捉えることで互に行き交う人情を除外することである。

次に、“能の仕組”についての考察を行う。仕組とは能の物語のことであり、主人公にとってこれから起こる出来事は、客観的な第三者のとして観ている物語であるということである。つまり、これから起こる出来事や出逢う人間を、自己とは直接的には無関係なものとして解釈することなのだと考えられる。

このように、人情による繋がりを絶ち客観的に見ることで、自分の身の回りに現れる出来事や他者を自己と切り離し無関係なものとしている。つまり、後半下線部にあるように、雲雀と菜の花の関係と同様に他者を大自然の点景と解釈し、風景の一部として捉えようとしているのである。これを能的世界とし、概略図を図-10に示す。

### iv) 能的世界の成立

この場面は、環境の抵抗3を契機に風景描写3に移行し、その後内省3へと移り変わる構成となっている。

まず、環境の抵抗3として“雨”が降り始めることを契機に、内省2から風景描写3へと移り変わる文章から始まる。雨が降ることで変化した風景を描写した一文を、以下に記載する。

雨の糸が濃かでほとんど霧を欺くくらいだから、隔たりはどれほどかわからぬ。時々風が来て、高い雲を吹き払うとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走っている所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよくちよく顔を出す。出すかと思うと、隠れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外広くなって、かつ平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぼたりぼたりと落つる頃、五六間先から、鈴の音がして、黒い中から、馬子がふうとあらわれた。

「ここに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いているうちに、馬子の姿は影画のように雨につつまれて、またふうと消えた<sup>24)</sup>。

ここでは、“雨”が降ることにより空間の境界が曖昧になっていることがわかる。また、馬子の登場箇所においても、能舞台の重要な構成要素の一つである「四拍子」を連想させる“鈴の音”から始まり、馬子が能舞台からはけるように消えていく姿が描かれており、空間が能舞台化している様子がわかる。また、主人公の意識も夢と現実の境界が定かでなくなる一文が示されている。これは、能の「夢幻能」をイメージさせる。「夢幻能」とは、現実と夢、この世とあの世が交差しながらストーリーが進行する能の典型的な構成のことであり、世阿弥が造った作品である「井筒」も「夢幻能」である<sup>25)</sup>。このように、空間の境界がぼやけることにより、自己と環境の境界も曖昧になり始めていることが分かる。

雨にうたれる主人公は雨具がないことにより、旅路を急がされる記述がある。そのことにより主人公の意識の変化がおこり始める。それを示した一文を以下に示す。

茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀箭が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。ただ降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間に、われはすでに詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。依然として市井の一豎子に過ぎぬ。雲煙飛動の趣も眼に入らぬ。落花啼鳥の情けも心に浮ばぬ。蕭々として独り春山を行く吾の、いかに美しきかはなおさらに解せぬ<sup>26)</sup>。

一方的な触覚的抵抗である雨という異なる環境を自己が受け入れている様子が分かる。このことにより、自己を環境に生かされるものとして解釈し、環境が主役の世界へ入り込んでいる。つまり、主役である環境の点景として自己を見出しているのである。

さらに、環境の点景と化した自己を含めた風景を客観的に見ようとしていることが分かる。

このように、雨が降ることで、空間の境界がぼけ、自己と環境の境界も曖昧になる。さらに、主人公が雨を受け入れることで、環境が主役の世界へ入り込み、客観的に環境と、そこに点景化した自己を組み合わせる捉えようとする場面である。この時の概略図を、**図-11**に示す。

#### v) 能的世界の成熟

この場面は、那古井へ向かう途中にある峠の茶屋に立ち寄る場面である。峠の茶屋は、那古井の情報をもった馬子の登場箇所<sup>27)</sup>が描かれており、自然があふれている

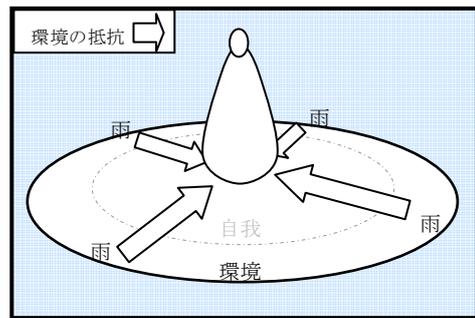


図-11 能的世界の成立概略図

山道から、人の世への回帰における境界的位置付けであると解釈できる。そのため、決心した他者との関係の持ち方を初めて実践する場面である。

まず、峠の茶屋に到着した主人公は、軒下から二度声を掛けるが、誰も出てこないため、許可なく家の中に入るところから始まる。腰掛けて待っていた主人公の前に、一人の婆さんが現れた際の一文を以下に示す。

どうせ誰か出るだろうとは思っていた。籠に火は燃えている。菓子箱の上に銭が散らばっている。線香は呑気に燻っている。どうせ出るにはきまっている。しかし自分の見世を明け放しても苦にならないと見えるところが、少し都とは違っている。返事がないのに床几に腰をかけて、いつまでも待っているのも少し二十世紀とは受け取れない。ここらが非人情で面白い。その上出て来た婆さんの顔が気に入った。

二三年前宝生の舞台で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人画だと思った。(中略) 茶店の婆さんの顔はこの写真に血を通わしたほど似ている<sup>28)</sup>。

前半下線部では、主人公が、婆さんの住む環境と、人情で繋がりをもつ俗世との違いを明確に感じ取っていることがわかる。

後半下線部では、婆さんの容姿に能の魅力を感じ取っていることがわかる。“高砂”とは、同じく世阿弥が造った能の曲目の一つで、のどかな春の海の曲である。物語の構成は「夢幻能」で、老婆は、人の形をした松の精の設定なのである<sup>29)</sup>。さらに、婆さんが指をさして、雨で今まで気づかなかった天狗岩の存在を気づかせてくれる。その風景描写の一文を以下に引用する。

逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしとばかりに吹き払う山嵐の、思い切りよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れ尽して、老嫗の指さす方にと、あら削りの柱のごとく聳えるのが天狗岩だそうだ。余はまず天狗巖を眺めて、次に婆さんを眺めて、三度目には半々に両方を見比べた。... (中略) ... 老人もこうあらわせば、豊かに、穏やかに、あたたかに見える。金屏にも、春風にも、あるは桜にもあしらって差し支えない道具である。余は天狗岩よりは、腰をのして、手を翳して、遠く向うを指している、袖無し姿の婆さ

んを、春の山路の景物として恰好なものだと考えた。余が写生帖を取り上げて、今しばらくという途端に、婆さんの姿勢は崩れた<sup>30)</sup>。

ここに見られるように、この場面では、天狗岩を背景においた婆さんとしてではなく、天狗岩の点景として婆さんを解釈していることがわかる。つまり、能的世界が繰り広げられているのである。概略図を、**図-12**に示す。

さらにこれに続く一文を以下に記述する。  
ただ一条の春の路だから、行くも帰るも皆近づきと見える。最前逢うた五六匹のじゃらんじゃらんもことごとくこの婆さんの腹の中でまた誰ぞ来たと**思われては山を下り、思われては山を登ったのだらう**。路寂寞と古今の春を貫いて、花を厭えば足を着くるに地なき小村に、婆さんは幾年の昔からじゃらん、じゃらんを数え尽くして、今日の白頭に至ったのだらう<sup>31)</sup>。

ここでは、また、婆さんが環境を主役とした世界に生きており、峠という環境の一部としてこの地に存在していることが、その後の文章から読み取ることができる。

このように、峠の茶屋は人の世の回帰における境界的位置づけであり、新しい他者の捉え方を、実際に他者へ試す場として描かれている。その捉え方により、他者を人情ではなく、環境との調和の美しさから見出そうとしていることがわかる。

### (3)主人公の環境の捉え方

『草枕』における対象段落の文章の分類結果を、**図-13**に示す。主人公の環境の捉え方の流れを見ていくと、主人公の意識は i)自我世界の反省では、人間関係で悩ま

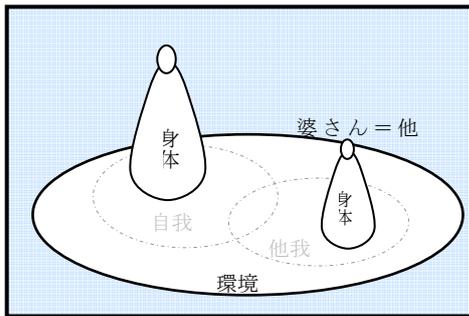


図-12 能的世界の成熟概略図

れ、周囲の環境に気づかない段階、ii)自我世界の消滅では、環境を住む場所と解釈することで環境へ溶け込み始める段階、iv)能的世界の成立では、環境が主役でその点景である人間と解釈する段階の三段階に分けられる。このように、段階を追って環境に対して密な関係を作り出していることが分かる。さらに、主人公はこれらの変化の契機として環境の抵抗を知覚していることが分かる。この抵抗が、環境を捉える際に重要なものであることがわかる。

## 4. 『草枕』と実風景の相関

本章では、3章で明らかにした五分類を、小説中の地形情報をもとに、2章で明らかにした地形の五分類と照らし合わせることでおおまかな位置を特定する。その上で、『草枕』の主人公の環境の捉え方を参考に現地調査を行うことで、実風景との相関について考察する。

### (1)「草枕」分類結果の位置の特定

本節では、小説の地形情報を参考に3章で明らかにした五分類の位置を、草枕ハイキングコース上に特定する。まず、v)能的世界の成熟の舞台である、峠の茶屋の位置を特定する。同コース上には峠は二箇所存在し、漱石が訪れた当時両地点に茶屋が存在していた<sup>32)</sup>。しかし、小説中の茶屋での会話のなかで“ここから那古井までは一里たらずだったね<sup>33)</sup>”と述べられているため、天水町から約3.9km付近の地点16に位置する二つ目の茶屋である野出の茶屋跡がモチーフだと考えられる。さらに、iv)能的世界の成立では、“もう十五丁行くと茶屋がありますよ。だいぶ濡れたね<sup>34)</sup>”と述べられており、野出の茶屋跡の約1.6km手前は12~14に位置するため、この場面は12~16に位置すると考えられる。さらに、ii)自我世界の消滅では、山路から平らな路へと切り替わる状況説明が述べられており、05~08に位置すると考えられる。この三箇所の特定により、i)自我世界の反省とiii)能的世界の決心のモチーフとなった場所もそれぞれ01~05と

	a) 自我世界の反省	b) 自我世界の消滅	c) 能的世界の決心	d) 能世界の成立	e) 能世界の成熟
役割	・人間世界からの反省	・環境への溶け込み	・人情の脱出の決心 ・客観的に見る決心	・環境が主役の世界への介入	・人情からの脱出の実践 ・客観的に見る ・環境と他者の調和
環境の解釈	・環境に気づかない	・敵対する環境 ・住む場所としての環境		・主役としての環境	
環境の抵抗		転ぶ、雲雀の声		雨	

図-13 文章の分類結果

08～12と特定できる。これらの結果を図-2で示した草枕ハイキングコースの地形による五分類の結果の概略図に照らし合わせ、位置を特定したものを図-14に示す。

## (2) 実風景との相関

主人公の意識が変化したii)自我世界の消滅とiv)能的世界の成立の二場面の現地の風景について見ていく。両場面では、環境の抵抗をうけることで環境の捉え方が変化している。このことより、環境の抵抗に着目して、風景を捉えていく。ii)及びiii)のii)場面における風景の流れを、図-15に示す。

ii)自我世界の消滅は図-15A)及びB)の境界に位置し、iv)能的世界の成立は図-15C)及びD)の境界に位置する。これらを実際に現地では体験すると、両者とも道の両端を木々に覆われたトンネルのような上り坂から、開放的な場所へ移行している。これらのトンネルは、周囲への視界がさえぎられていることや、上りの急斜面であることから環境の抵抗をうける場所であることがわかる。これにより、環境が自己に抵抗するものとして感じられた。またそれを通過した後、スカイラインがくっきり見えるような構図的な風景が現れる。これにより、自己が受けていた抵抗を引き起こしていた環境の相貌を、生きたもののように捉えることができた。

このように、環境の抵抗を構図的な風景の前に受けることで、自己に対するものの相貌として、感情を移入しながら風景を捉えることができるのではないだろうか。

## 5. まとめ

### (1) 結論

本論文では、草枕ハイキングコースの分析と、『草枕』の読解をもとに、環境の捉え方に関する考察を深めることを目的とした。その結果、草枕ハイキングコースを地形的に分析することで、五区間に分類することができた。また、『草枕』の対象段落を、主人公の意識の流れによって分類し、主人公の環境の捉え方を明らかにした。加えて、『草枕』では環境の抵抗を契機として、環境へ意識が向き始めていることが明らかとなった。さらに、『草枕』と実風景の相関を考察することで、構図的な風景の前に受ける環境の抵抗を通じて、環境を相貌的に捉えることができる可能性を示唆した。

### (2) 今後の課題

本論では、『草枕』中の「一」及び「二」のみを対象段落としたため、得られた考察結果は両段落についての考察結果である。よって、今後の課題として、本論での考察結果が『草枕』の後半と整合しているのかについて、分析・考察を行うことが必要である。また、対象である草枕ハイキングコースを改善する際に活用できるかどうかについて、今後更なる検証が必要であるといえる。

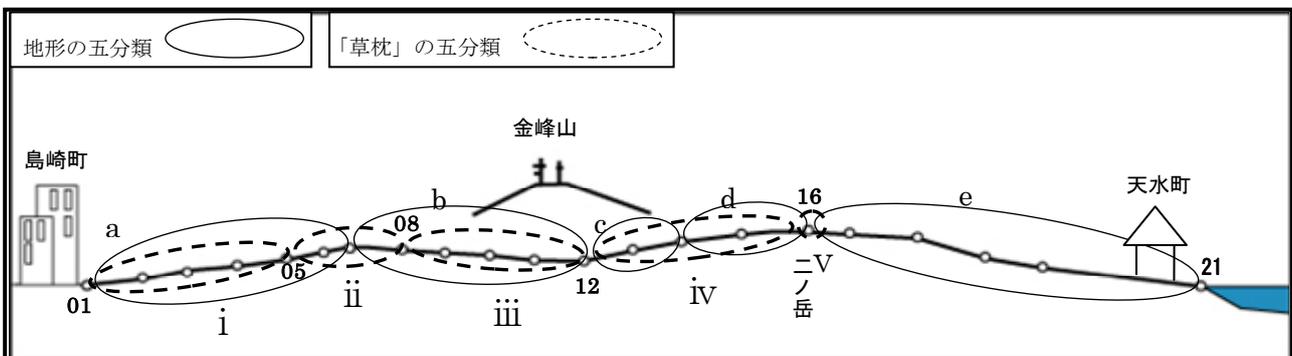


図-14 「草枕」による五分類の位置の特定

### b) 自我世界の消滅



A) 地点の風景



B) 地点の風景

### d) 能的世界の成立



C) 地点の風景



D) 地点の風景

図-15 風景の流れ

## 参考文献

- 1) 中村良夫：風景学入門，p28，中公新書，1982
- 2) 柄谷行人：日本近代文学の起源，pp25-29，講談社，1988
- 3) 同上，pp20-21
- 4) 夏目漱石：草枕・二百十日，p257，角川文庫，2000
- 5) 熊本県天水町：天水町史，p911，2005
- 6) 池田朋子，紺野昭：文学作品中の空間描写から都市・地域景観を読み取る方法に関する研究 小説『城のある町にて』をケーススタディとして，日本建築学会計画系論文報告書，第450号，pp121-130，1993.8
- 7) 池田朋子，大貝彰：1970～94年の芥川賞受賞作品群にみる自然景観イメージとその変遷，日本建築学会計画系論文集，第494号，pp161-168，1997.4
- 8) 吉村晶子，アンドレア・ヤニックー，橋本健一，中村良夫：「おくのほそ道」における風景の動的生成手法に関する研究，造園学会誌ランドスケープ研究，Vol. 60, No. 5, pp567-572, 1997.3
- 9) 山崎隆之，十代田朗：地域イメージの表現手法に関する研究 - 司馬遼太郎『街道をゆく』における文章構成の分析から - ，日本都市計画学会都市計画論文集，No. 39-3, 2004.10
- 10) 出村嘉史，大住由布子，川崎雅史，樋口忠彦：本居宣長『在京日記』にみる行楽地としての東山景息の構成，土木学会論文集D, Vol. 63, No. 2, pp158-168, 2007.6
- 11) 若山滋，張奕文，渡辺孝一：夏目漱石の作品の中の建築の研究—舞台空間の推移からみた作品の類型について—，日本建築学会計画系論文集，第476号，pp101-109, 1995.10
- 12) 若山滋，張奕文，渡辺孝一：夏目漱石の前期の長編小説の舞台となる建築空間の「意味」，日本建築学会計画系論文集，第478号，pp131-139, 1995.12
- 13) 徐貴淑，河邊聡：境界的空間が持つ意味についての考察 漱石の『草枕』に見る四つの境界的空間，日本建築学会計画系論文集，第485号，pp227-235, 1996.7
- 14) 徐貴淑：漱石の『草枕』に見る絵画的言語空間における建築的空間構図，日本建築学会計画系論文集，第508号，pp233-240, 1998.6
- 15) 吉井正敏：金峰山地域の火山地形について，熊本大學教育學部紀要，pp135-144, 1955
- 16) 新村出：広辞苑第三版，p2037，岩波書店，1985
- 17) 夏目漱石：前掲書4)，p6
- 18) 同上，p11
- 19) 同上，pp7-8
- 20) 同上，p8
- 21) 同上，p9
- 22) 同上，p11
- 23) 同上，pp13-14
- 24) 同上，p15
- 25) 戸井田道三，小林保治：能楽ハンドブック，p60，三省堂，1996
- 26) 夏目漱石：前掲書4)，p16
- 27) 同上，p24
- 28) 同上，pp17-18
- 29) 戸井田道三，小林保治：前掲書25)，p123, 1996
- 30) 夏目漱石：前掲書4)，p19
- 31) 同上，p22
- 32) 熊本県天水町：前掲書5)，p881
- 33) 夏目漱石：前掲書4)，p20
- 34) 同上，p15